活用力を育み高める算数科の授業の創造
～対話的な学びを通して～

喜多方市立塩川小学校　教諭　五ノ井　達也

１　研究の趣旨

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」の重要性が指摘されている。友達と比較・検討し、考えを広め、深めながら主体的に問題を解決する力を高めるために、「対話的な学び」の場面に焦点を当て、研究を進めてきた。「対話的な学び」をより充実させるためには、「自己肯定感」を高めること、親和的な学級集団を作ることが前提条件となると考えた。

本研究では、この前提条件をもとに、対話の場面で対話のツールの活用や教師のコーディネートの工夫に取り組み、下記のような「めざす子どもの姿」を設定し、本主題に迫った。

めざす子どもの姿

自分の考えをもち、広げ、深めながら、よりよく問題を解決できる子ども

２　研究の概要

⑴　対話的な学びの前提となる日常活動の工夫

①　レディネスを揃えるための放課後学習会の工夫
②　自己肯定感・友達肯定感を高める「なかたくタイム」の充実
③　「親和的な学級集団づくり」のための学級力アンケートの可視化と「スマイルタイム」の実践

⑵　見方・考え方を広げ深める対話的な学びの工夫

①　自分との対話
②　教材との対話
③　友達との対話

３　成果と今後の課題

【成果】

・　対話的な学びの前提となる「親和的な学級集団づくり」の工夫により、様々なアンケートや意識調査により、「自己肯定感」の高揚や「いごこちのよい学級」を感じる児童が増えた。
・　「対話的な学び」の場面において、ツールの活用や教師のコーディネートの工夫により、NRT学力検査でアンダー・アチーバーが半減し、オーバー・アチーバーが倍増するなど、解決の見通しを持ち、考えを広げ、深めながら問題を解決する子どもを育てることができた。

【課題】

・　対話の対象、内容や目的、対話のツールを明確にした対話的な学びの工夫により、教師のコーディネート力が向上してきた。しかし、上学年では、対話の場面で分かったつもりで学習が進んでいる傾向がある。
・　研究単元の事後テストでは、「数学的な考え方」の観点について、期待値を下回る学年があった。また、約１割の児童が、適用問題で「知識・技能」の習熟を感じていないことが、意識調査から把握できた。

以上のことから、今後は、対話的な学びの場をさらに大切にしながら、個に応じた習熟の時間を十分確保し「分かる・できる」授業づくりをさらに展開していきたいと考える。